

# 三億で買われた元アイドル、ヤクザの組長に何度も抱かれて堕ちていく

## 目次

第1話 「売られた  
夜」

3

第2話 「飼い慣らし」  
20

第3話 「鳴かない鳥」  
34

第4話 「闇の中で」  
48

第5話 「奉仕の型」  
61

第6話 「決別の夜」  
75

第7話 「雨の逃避行」  
90

第8話 「日常の隙間」  
105

第9話「狂い咲き」

119

第10話「鏡の告白」

135

## 第1話 「売られた夜」

「起きろ」

低い声が鼓膜を揺らした。

蒼真は重いまぶたをこじ開けた。暗い。冷たい。コンクリートの匂いが鼻を突く。

身体を起こそうとして、手首に食い込む感触に気づく。革のベルトだ。両手を背中で縛られている。足首にも同じ感触。完全に拘束されていた。

「やっと目が覚めたか」

声の主が蒼真の視界に入った。

切れ長の目。薄い唇に浮かぶ余裕の笑み。黒髪をオールバックにした男が、革張りの椅子に深く腰掛けていた。

高そうなスーツを着崩している。左耳に光るピアス。足を組み、グラスを揺らしながらこちらを見下ろす姿。全身から漂う、圧倒的な威圧感。

ここはどこだ。蒼真は視線を巡らせた。地下室だろうか。窓がない。天井の蛍光灯だけがぼんやりと空間を照らしている。

「誰だ、お前」

「久條壱織。お前の新しい飼い主だ」

蒼真の背筋を冷たいものが走った。

「飼い主だと？」

「三億だ」

壱織が指を組んだ。長い指。爪が綺麗に整えられている。

「お前を買うのにかかった金額。安くはなかったが、まあ、元は取れるだろう」

「買う？ 何の話だ」

蒼真は必死に記憶を辿った。事務所で社長と話していて、お茶を出されて、それから意識が途切れた。

「まさか」

「察しがいいな。お前の可愛い社長さんが、借金のカタにお前を売った」

息が止まった。

社長。孤児院から自分を引き取り、アイドルへの道を開いてくれた人。父親のように慕っていた、あの人が。

「嘘だ」

「信じたくないのは分かる。だが事実だ」

壱織がグラスをサイドテーブルに置き、立ち上がった。革靴の音がコンクリートに響く。一歩、また一歩と近づいてくる。

「お前の社長、随分と金に困っていたらしいな。事務所の経営は火の車。お前というドル箱を持っていながら、ギャンブルで全部溶かした」

「嘘だ。社長はそんな人じゃない」

「人は金のためなら何でもする」

壱織が蒼真の前にしゃがみ込んだ。近い。整った顔が目の前にある。

「お前も、いずれ分かる」

蒼真は壱織を睨みつけた。

「お前は今日からここで暮らす。俺を楽しませるのが仕事だ」

「ふざけるな」

蒼真は身体をよじった。拘束が手首に食い込み、痛みが走る。

「離せ！　俺はアイドルだ、こんなこと」

「元アイドル、だな」

壱織の声には嘲りが混じっていた。

「PRISMのセンター、水嶋蒼真。二十三歳。孤児院出身で、十五の時に芸能事務所に拾われた。得意なのはダンス。ファンの間では『天使の笑顔』と呼ばれていたらしいな」

「なんでそこまで知ってる」

「調べるに決まってるだろう。三億も払ったんだ、商品の中身は把握しておかないとな」

商品。その言葉が蒼真の胸を抉った。

「俺は物じゃない」

「そうか？」

壱織が蒼真の顎を掴んだ。長い指が肌に食い込む。

「お前を育てた男が借金のカタに売り飛ばしたんだぞ。物以下の扱いだ」

言い返せなかった。事実だから。

「まあいい。お前がどう思おうと、事実は変わらない」

壱織の瞳が蒼真を射抜いた。黒い、底の見えない目。だがその奥に、何か別のものが潜んでいるような気がした。

「お前は俺のものだ。それだけ覚えておけ」

壱織が顎を離した。蒼真は荒い息をつく。

「それから、一つ教えておく」

壱織が再び立ち上がりながら言った。

「お前の社長、色々と裏があるらしい。俺が知りたいことを知っている可能性がある」

「何の話だ」

「今は言わない。そのうち分かる」

意味深な言葉を残し、壱織がポケットに手を入れた。取り出されたのは、黒い革製の首輪。銀色の金具が蛍光灯の光を反射している。

「さて、まずは印をつけないとな」

首輪が喉元に巻かれた瞬間、蒼真の身体が強張った。

冷たい革の感触。きつすぎず、緩すぎず、ぴったりと首に巻きついている。カチリ、と金属音が響いた。

「似合うじゃないか」

壱織が満足げに目を細めた。首輪の先にはリードがついている。銀色の鎖が胸の前に垂れ下がった。

「外せ」

「外さない」

リードが軽く引かれた。蒼真は前のめりに倒れそうになり、必死に体勢を保つ。

蒼真は唇を噛んだ。悔しい。こんな屈辱は初めてだった。アイドルとして、何万人ものファンの前でステージに立っていた自分が、今は首輪をつけられて床に這いつくばっている。

「さて」

壱織がリードを握ったまま、蒼真の前に回り込んだ。

「抵抗するなら好きにしる。俺は構わない」

「何を」

「むしろ、その方が楽しめる」

壱織の手が蒼真の胸元に伸びた。シャツの第一ボタンに指がかかる。

蒼真は身体を振った。だが手首は背中で縛られたまま、足首も固定されている。逃げ場などなかった。

ボタンが一つ外された。次のボタンに指がかかる。

「お前、随分と肌が白いな」

「触るな」

「無理だな。三億払ったんだ、隅々まで確認させてもらう」

二つ目のボタンが外された。三つ目。四つ目。一つずつ、ゆっくりと。壱織の目が蒼真の反応を楽しんでいるのが分かった。

最後のボタンが外され、シャツがはだけられた。蒼真の上半身が露わになる。

白い肌。適度に引き締まった腹筋。ダンスで鍛えた身体は、無駄な脂肪がついていない。小さく尖った乳首が、寒さで硬くなっている。

「なかなかいい身体してるな」

壱織の視線が蒼真の胸を舐めるように這った。

「アイドルの身体か。見た目だけは上等だ」

「見るな」

「見る。お前は俺のものだからな」

壱織の指が蒼真の鎖骨をなぞった。冷たい指先が肌の上を滑っていく。首筋から胸の中心へ。ゆっくりと、品定めするように。

「ひっ」

予想外の感覚に、蒼真は小さく声を上げた。

「敏感だな」

「違う」

「嘘をつくな。鳥肌が立ってる」

言われて気づいた。自分の腕に細かい鳥肌が立っている。寒さのせいだと思っていたが、違うと分かっていた。

壱織の指が胸の中心を通り、乳首の横をかすめた。

「んっ」

「ここか」

乳首を指で軽く撫でられた。ぞくりと背筋が震える。

「そこは」

「嫌か？」

「当たり前だ」

「そうか」

壱織が乳首を指で摘んだ。親指と人差し指で軽く挟み、ゆっくりと捻る。

「あっ」



声が漏れた。止められなかった。自分の声とは思えない、甘い響き。

「いい声だな」

「出したくない」

「でも出てる」

もう片方の乳首も摘まれた。両方同時に捻られる。左右交互に、リズムをずらしながら。

「ひあっ、あ」

「感度がいいな。アイドルは普段、こういうことしないのか」

「するわけない」

「そうか。それなら尚更いい」

壱織が乳首を強く摘んだまま引っ張った。蒼真の身体が仰け反る。小さな突起が引き伸ばされ、離されると弾むように元に戻る。

「あああっ」

「処女みたいな反応だ。可愛いな」

「処女じゃない。男だ」

「分かってる」

壱織が顔を近づけた。温かい吐息が乳首にかかる。

「だから興奮するんだ」

舌が乳首を舐めた。温かく湿った感触が敏感な突起を包む。

「ひっ、や」

舌先が乳首の周りを円を描くように動いた。時々、先端をちろりと舐め上げる。唾液で濡れた乳首が、空気に触れてひやりとする。

「んあっ、あ、あ」

蒼真のペニスが反応し始めていた。ズボンの中で、少しずつ硬くなっていく。布地が窮屈になる感覚。

嫌だ。こんな男に感じるなんて。

「身体は正直だな」

壱織の手が蒼真の股間に伸びた。ズボン越しに、膨らみ始めた部分を撫でる。

「そこは」

「ここが本番だ」

ベルトのバックルが外された。カチャリという金属音。ジッパーが下ろされる。蒼真は必死に足を閉じようとしたが、足首を縛られているせいで動けなかった。

ズボンが引き下ろされた。白い下着だけになった下半身が露わになる。下着の前面が、明らかにテントを張っている。先端部分に、小さな染みができ始めていた。

「もう濡れてるな」

壱織が下着の上から蒼真のペニスをなぞった。指で形を確かめるように、竿から亀頭まで撫でる。下着越しでも分かる、熱と硬さ。

「んっ」

「口では嫌がっても、身体は正直だな」

「これは」

「何が違う？ 勃ってるだろう。先走りも出てる」

下着がずり下ろされた。蒼真のペニスが解放され、ぴんと上を向いた状態で空気に晒される。亀頭は既に赤く色づき、先端から透明な液体が糸を引いていた。

「サイズも悪くない」

壱織が蒼真のペニスを握った。長い指が竿を包み込む。適度な圧力。掌の熱が直接伝わってくる。

「あっ」

「冷たいか？」

「熱い」

「そうか。すぐにもっと熱くなる」

壱織の手がゆっくりと動き始めた。根元から先端へ、先端から根元へ。一定のリズムで上下する。皮を動かしながら、亀頭を露出させ、また包む。

「んっ、あ」

蒼真は唇を噛んだ。声を出したくない。感じていることを悟られたくない。だが身体は正直だった。腰が勝手に動きそうになる。

「我慢するな。どうせ無駄だ」

「うるさい」

「強がるなよ」

壱織の親指が亀頭を撫でた。先端の窪みを擦り、そこから滲み出した先走り液を指に絡める。ぬるりとした感触。

「もう濡れてる。こんなに出して」

蒼真は歯を食いしばった。

「感じてるんだろう？ 認める」

「認めない」

「そうか」

壱織の手が速度を上げた。シュコ、シュコ、と湿った音が響き始める。先走り液が潤滑剤になり、壱織の手を滑らせていく。

「あ、あ」

声が漏れる。止められない。壱織の手が気持ちいい。認めたくないのに、身体が勝手に反応している。ペニスが更に硬くなり、血管が浮き出てくる。

「ほら、声が出てる」

「出したくないのに」

「でも出てる。身体は嘘をつけない」

壱織の手が更に激しくなった。ペニス全体を握り、捻るように擦り上げる。ぬちゅ、ぬちゅ、と下品な音が地下室に響いた。

「そんな、激しく」

「お前が感じてるから、こうなるんだ」

壱織のもう片方の手が蒼真の睨丸を包んだ。二つの球を掌に乗せ、柔らかく揉みながら、同時にペニスを扱き続ける。

「ひあっ、あ、あ、あっ」

蒼真の腰が跳ねた。身体が勝手に動いてしまう。壱織の手に向かって、腰を突き出しそうになる。

「いい反応だ。もっと見せろ」

「見せない」

「嘘つき」

壱織の親指が裏筋を擦り上げた。亀頭の下、カリの部分から竿に沿って走る筋。最も敏感な部分を執拗に刺激する。

「ひっ。そこ、だめ」

「ここが弱いのか」

裏筋を集中的に責められる。親指の腹が何度も同じ場所を擦り上げる。蒼真の思考が白く染まっていく。

「や、出ちゃう」

「出せばいい」

「嫌だ。お前の手で、出したくない」

「遅い」

壱織が亀頭を強く握り、同時に裏筋を親指で擦り上げた。その瞬間、蒼真の身体の奥で何か弾けた。

「あっ」

蒼真の身体が弓なりに反った。白濁した精液が噴き出す。一発目は壱織の手を飛び越え、蒼真自身の胸まで飛んだ。二発目、三発目。勢いよく噴射される。壱織の指の間を伝い、蒼真の腹に垂れ落ちる。

「んっ、あ、あ」

びくびくと痙攣するペニスから、最後一滴まで搾り取られていく。壱織の手が止まらない。射精後の敏感なペニスを、まだゆっくりと擦り続けている。

「や、もう出た」

「まだだ」

「敏感すぎる」

「それがいいんだろう」

射精直後のペニスを責められ、蒼真は声にならない声を上げた。快感と苦痛の境界線上で、身体が痙攣し続ける。亀頭を軽く撫でられるだけで、全身に電流が走る。

「あっ、あああっ」

やっと壱織の手が止まった。蒼真は荒い息をつく。全身が汗ばんでいた。髪が額に張り付き、視界がぼやける。

「いい顔だな」

壱織が精液で汚れた指を蒼真の顔の前に持ってきた。長い指に絡みつく白濁した液体。

「舐めろ」

蒼真は顔を背けようとした。だがリードを引かれ、首輪が喉を締める。

「ぐっ」

「早くしろ」

抵抗する力など、もう残っていなかった。蒼真は震える舌を出し、壱織の指を舐めた。

塩気と、微かな苦み。自分の精液の味。生臭さが口の中に広がる。

「そうだ、いい子だ」

壱織が蒼真の髪を撫でた。まるでペットを褒めるように。

涙が滲んだ。悔しさで、屈辱で、そして自分自身への嫌悪で。

「泣くな」

壱織が蒼真の涙を指で拭った。その仕草が妙に優しくて、蒼真は余計に混乱した。

「これはまだ始まりだ。お前にはもっと覚えてもらうことがある」

「もうやめてくれ」

「やめない」

壱織が蒼真を床に押し倒した。両手を縛られたまま、仰向けにされる。冷たいコンクリートが背中に当たる。

「次は、こっちだ」

壱織が蒼真の上に覆いかぶさった。両手を頭の横について、蒼真を見下ろす。その目が暗く光っている。

「お前の身体、隅々まで覚えさせてもらう」

壱織の唇が蒼真の首筋に落ちた。舌で肌をなぞり、軽く吸い上げる。

「んっ」

「ここにも印をつけておくか」

首筋を強く吸われた。痛みと快感が混ざった感覚。確実に跡が残るだろう。

「やめろ、跡が」

「跡がどうした。お前は俺のものだ。印があって当然だ」

壱織の手が蒼真の胸に伸びた。乳首を両方同時に指で挟み、捻る。

「あっ」

「さっきから気になっていた。お前、ここも相当感じるだろう」

「そこ、だめだ」

「だめ、だめ、ばかりだな」

壱織が蒼真の乳首を舌で舐めた。ぞくりと電流が走る。唾液で濡れた乳首が、ぴんと尖っている。

「ひっ、あ」

「お前の口から聞きたいのは別の言葉だ」

「何を」

「例えば、気持ちいい、とか」

「言うわけない」

「すぐに言うようになる」

乳首を吸われた。きゅっと吸い上げられ、舌先で転がされる。同時に、もう片方の乳首を指で摘まれる。

「んあっ、あ、あ」

蒼真のペニスが再び硬くなり始めていた。さっき出したばかりなのに。壱織の刺激が、身体を否応なしに反応させる。

「もう反応してるな。若いな」

壱織の手が蒼真のペニスを再び握った。まだ敏感な状態のそれを、ゆっくりと擦り始める。まだ半勃ちのペニスが、その刺激で急速に硬さを取り戻していく。

「や、さっき出したばかりだ」

「だから何だ」

「無理だ。もう出ない」

「出るまでやる」

壱織の手が速くなった。同時に、乳首への刺激も激しくなる。舌と指で交互に責められ、蒼真の思考が溶けていく。



「あっ、あっ、あっ」

上半身と下半身、両方から責められる。快感が波のように押し寄せる。逃げ場がない。

「抵抗するほど興奮するんだな」

壱織が耳元で囁いた。熱い吐息が耳を擦る。

「俺もだ」

その言葉が妙に生々しく響いた。壱織のズボンの前が、わずかに膨らんでいるのが見えた。

「お前のその顔を見ていると、壊したくなる」

「壊す？」

「安心しろ。壊し方は心得ている」

壱織の手が更に激しくなった。ペニスを握る力が強くなり、擦る速度が上がる。ずりゅっ、ずりゅっ、と下品な音が響く。先走り液と残った精液が混ざり、ぬるぬるとした感触になっている。

「あ、やっ、また、出る」

「出せ」

「無理だ。さっき出したばかり」

「無理じゃない。出るまで止めない」

乳首を強く吸われた。歯で軽く噛まれ、舌で擦られる。同時に、ペニスの裏筋を親指で擦り上げられる。

「ひあっ、あ、あ、あっ」

二度目の射精。さっきより量は少ないが、快感は倍以上だった。痙攣するペニスから精液が絞り出される。腹の上に、白い液体が点々と散った。先程の分と混ざり、肌の上で光っている。

「はあ、はあ」

蒼真は完全に力を失った。身体が言うことを聞かない。視界がぼやける。意識が遠くなりそうだった。

「いい眺めだ」

壱織が満足げに蒼真を見下ろした。精液まみれで、涙で顔を濡らして、荒い息をつく元アイドル。

「元アイドルが精液まみれで喘いでる。これだけで三億の価値はあったな」

言い返す気力もなかった。

壱織が立ち上がり、ハンカチを取り出して手を拭いた。

「今日はここまでにしてやる。身体を休めておけ」

蒼真は答えなかった。

「明日からが本番だ。お前には色々と教えることがある」

壱織が踵を返した。足音が遠ざかっていく。

「ああ、それから」

扉の前で立ち止まり、壱織が振り返った。

「逃げようなんて考えるなよ」

その目が冷たく光った。だが一瞬、何か別の感情が過ぎったような気がした。

「お前の命は、俺のものだ」

扉が閉まりかけた。その直前、壱織が一瞬だけ振り返った。

その横顔に浮かんだのは、冷酷さではなかった。何かを懐かしむような、それでいて苦しそうな、歪んだ表情。

扉が閉まった。

暗闘の中、蒼真は天井を見上げた。首輪の重さが、現実を突きつけてくる。

社長が自分を売った。三億で。

涙が頬を伝った。止まらなかった。

それでも、心のどこかで思っていた。

壱織の目。最後に見せた、あの一瞬の揺らぎ。あれは何だったのだろう。見間違いだ。そう思うことにした。

ただの冷酷な男ではない気がする。何か、別の目的がある。壱織が言っていた「社長が知っていること」とは何だ。

だがそんなことを考えている場合ではない。逃げなければ。ここから出なければ。

蒼真は拘束された手首を動かそうとした。革のベルトが食い込み、痛みが走る。

無理だ。今の状態では、どうにもならない。

蒼真は目を閉じた。冷たい床の上で、眠れない夜が始まった。

## 第2話「飼い慣らし」

「起きたか」

声に目を開けた。天井が違う。昨夜のコンクリートではない。

蒼真は身を起こし、首に巻かれた革の感触を確認した。首輪はまだついている。リードの先は、ベッドの柱に結びつけられていた。

部屋を見回す。広い。高級そうな調度品が並んでいる。大きな窓からは朝日が差し込み、床に長い影を作っていた。壁には抽象画が飾られ、サイドボードには高そうな酒のボトルが並んでいる。

「ここは」

「俺の私室だ。昨日の地下室より快適だろう」

壱織だった。白いシャツにスラックスという軽装。シャツの袖を肘まで捲り上げ、筋肉質な腕が見えている。それでも纏う威圧感は変わらない。

壱織がサイドテーブルにトレイを置いた。朝食らしい。こんがりと焼けたトーストと半熟の目玉焼き、新鮮な野菜のサラダ。湯気の立つコーヒーからは芳しい香りが漂っている。

「食え。腹が減ってるだろう」

蒼真は壱織を睨んだ。

「毒でも入ってるんじゃないのか」

「入れる意味がない。三億も払って毒殺するほど俺は馬鹿じゃない」

言い返せなかった。壱織の言葉には常に論理があった。感情ではなく、計算で動いている。それが余計に不気味だった。

「それに」

壱織がベッドの端に腰掛けた。近い距離に蒼真の身体が強張る。

「お前を殺すつもりなら、とっくにやってる。昨夜のうちにな」

「何が目的だ」

「昨日も言っただろう。俺を楽しませる、それだけだ」

「嘘だ」

蒼真は壱織の目を見据えた。黒い瞳に、自分の顔が映っている。

「昨日、何か言ってた。社長が知ってることがあるって。俺を買ったのは、それが目的なんだろう」

壱織の目が一瞬、鋭くなった。だがすぐに余裕の笑みに戻る。

「察しがいいな。アイドルは顔だけじゃないらしい」

「馬鹿にするな」

「馬鹿にしていない。褒めてるんだ」

壱織が立ち上がり、窓際に移動した。朝日を背にした姿が逆光で影になる。広い肩、引き締まった腰。その後ろ姿に、蒼真は不思議な既視感を覚えた。

「だが、今は教えない」

「なぜ」

「お前が知る必要がないからだ。今のところはな」

壱織が振り返った。その顔には、昨夜とは違う表情が浮かんでいた。冷静な、だがどこか寂しげな眼差し。

「お前の社長、いや、元社長か。水嶋を拾ってアイドルに育てた男。名前は確か、藤堂だったな」

「社長の名前を出すな」

「なぜだ。お前を売った男だぞ」

蒼真は言葉に詰まった。そうだ。社長は自分を売った。三億で。なのに、なぜまだ庇おうとするのか。

「調べさせてもらった」

壱織がポケットから紙を取り出した。何かのリストらしい。細かい文字がびっしりと並んでいる。

「藤堂は表向きは芸能事務所の社長だが、裏では色々とやっている。違法カジノへの出入り、反社会勢力との繋がり。そして、ある事件への関与が疑われている」

「事件？」

「十年前の話だ。ある組の組長が殺された。その事件に、藤堂が関わっている可能性がある」

蒼真の心臓が跳ねた。十年前。自分が孤児院から引き取られた頃だ。社長が突然現れて、自分を引き取ると言った。あの時の社長の目。今思えば、何か企んでいるような目だった。

「まさか」

「そのまさかだ」

壱織が振り返った。その目には、昨夜とは違う感情が浮かんでいた。冷たい怒り。そして、深い悲しみ。

「殺されたのは、俺の親父だ」

息が止まった。

「お前の社長が、俺の親父を殺した人間と繋がっている。直接手を下したかどうかは分からない。だが、何かを知っている。だから俺はお前を買った。情報を引き出すためにな」

「俺は何も知らない」

「分かってる。だが、お前を使えば藤堂を動かせる可能性がある。お前は藤堂にとって、金になる木だった。手放したとはいえ、完全に切り捨てたわけじゃないだろう」

壱織が蒼真に近づいた。ベッドに片膝をつき、蒼真の顎を掴む。長い指が肌に食い込む。

「安心しろ。お前が素直にしていれば、悪いようにはしない」

「素直に」

「そうだ。俺の言うことを聞け。それだけでいい」

壱織の指が蒼真の首輪に触れた。金具を弄びながら、低い声で続ける。

「お前は俺のペットだ。飼い主には逆らうな」

蒼真は壱織を睨みつけた。

「さあ、朝食を食え。その後で、お前の新しい仕事を教えてやる」

朝食を終えた蒼真は、壱織に連れられて隣の部屋に移動した。

そこは書斎だった。壁一面の本棚には、難しそうな本がぎっしりと詰まっている。重厚な執務机。その上には書類の山と、高級そうな万年筆。革張りのソファが部屋の中央に置かれ、その前には低いテーブル。

「座れ」

壱織がソファを指した。だが蒼真が腰を下ろそうとすると、壱織が首を振った。

「そこじゃない」

「どこに座れって」

「ここだ」

壱織がソファに腰掛け、自分の膝を叩いた。

蒼真の顔が強張った。

「冗談だろ」

「俺が冗談を言うように見えるか」

「見えない。だから余計に無理だ」

「無理じゃない。命令だ」

壱織がリードを引いた。首輪が喉を締め、蒼真は前のめりに引き寄せられる。

「早くしろ。俺は待つのが嫌いだ」

抵抗しても無駄だと分かっていた。昨夜、それは嫌というほど思い知らされた。

蒼真は渋々、壱織の前に立った。

「どう座れば」

「背中を向ける。俺に背を預ける形だ」

言われるままに向きを変え、壱織の膝の上に腰を下ろした。

壱織の体温が背中に伝わってくる。広い胸板。筋肉質な太もも。蒼真より一回り大きな身体に、すっぽりと包み込まれる形になった。逃げ場がない。壱織の呼吸が背中に伝わり、心臓の鼓動さえ感じられるような距離。

「いい子だ」

壱織の腕が蒼真の腰に回った。後ろから抱きかかえられる。壱織の顎が蒼真の肩に乗る。

「昨日は随分と暴れたな」

耳元で囁かれた。低い声が直接響く。吐息が首筋を擦り、蒼真の身体が震えた。

「今日は大人しくしてられるか？」



「何をする気だ」

「お前を舐める」

壱織の手が蒼真の腹に触れた。薄いシャツ越しに、指が肌をなぞる。ゆっくりと、探るように。

「昨日は手荒だった。今日はゆっくりやる。お前の身体を、隅々まで覚える」

「やらなくていい」

「俺が決める」

壱織の指がシャツの裾から中に入った。直接、肌に触れる。冷たい指先が腹筋の上を滑っていく。蒼真の腹筋が反射的に引き締まった。

「ひっ」

「敏感だな。昨日と同じだ」

指が胸に向かって這い上がる。ゆっくりと、焦らすように。肋骨の一本一本をなぞり、胸の膨らみに近づいていく。

「今日のルールを覚えておく」

「ルール？」

「声を出すな」

蒼真は眉を寄せた。

「声を出さなければ、早く終わる。出したら、最初からやり直した」

「そんな」

「できないか？」

蒼真は唇を噛んだ。

「やってみる」

「いい子だ」

壱織の指が乳首に触れた。小さな突起を指先で軽く撫でるだけ。それだけで蒼真の身体がびくりと跳ねる。

声を出しそうになって、必死に唇を噛んだ。口の中に血の味が広がる。

「我慢してるな。いいぞ、その調子だ」

乳首を指で挟まれた。親指と人差し指で軽く摘み、くりくりと転がす。敏感な突起が指の間で弄ばれる。

「んっ」

鼻から息が漏れる。声ではない。だがギリギリだった。

「昨日、ここが弱いと分かった」

壱織が乳首を引っ張った。ぴんと伸ばされ、離すと弾むように戻る。何度も繰り返される。引っ張って、離して。引っ張って、離して。

「ふっ」

「まだ大丈夫か？」

「大丈夫だ」

「そうか」

もう片方の乳首も同じように責められ始めた。両方同時に摘まれ、捻られ、引っ張られる。左右交互に、リズムをずらしながら。片方が引っ張られている間に、もう片方は捻られる。

蒼真は唇を噛み締めた。歯が食い込み、血の味がする。声を出してはいけない。出したらやり直した。

「頑張ってるな」

壱織の舌が蒼真の耳を舐めた。温かく湿った感触。耳たぶを軽く噛み、舌先で穴の周りをなぞる。耳の中に息を吹きかけられ、ぞくりと背筋が震えた。

「ひっ」

短い声が漏れた。蒼真は慌てて口を押さえる。

「今のは？」

「声じゃない」

「そうか？ 俺には声に聞こえたが」

「違う。息が漏れただけだ」

「まあいい。今回は見逃してやる」

壱織の手が下に移動した。腹を撫で、ベルトに指をかける。

「次は下だ。もっと難しくなるぞ」

ベルトが外された。カチャリと金属音が響く。ジッパーが下ろされる。壱織の手がズボンの中に入ってきた。

下着越しに、ペニスを掴まれた。まだ半勃ちの状態だったが、壱織の手に包まれた途端、急速に硬くなっていく。血液が下腹部に集まり、布地の中でペニスが膨張していく。

「反応がいいな。身体は正直だ」

下着がずらされ、ペニスが露出した。後ろから抱かれた状態で、股間だけが剥き出しになる。壱織の膝の上で、蒼真のペニスが上を向いて立ち上がっている。

「恥ずかしいか？」

蒼真は答えられなかった。

「答える」

「恥ずかしい」

「そうだろうな。元アイドルが、男の膝の上で勃起したペニスを晒してる。ファンが見たら何と思うだろうな」

「言うな」

「声は？」

「出してない」

「ならいい」

壱織の手がペニスを握った。長い指が竿を包み込む。掌の熱がペニスに伝わってくる。根元から先端まで、ゆっくりと指を滑らせる。

「んっ」

鼻から声が漏れた。必死に唇を結ぶ。

「お前のペニス、形がいいな」

竿を指でなぞりながら、壱織が耳元で囁いた。低い声が脳を直接揺らすようだ。

「長さも太さも申し分ない。亀頭も大きい。感度も良さそうだ」

親指が亀頭を撫でた。先端の窪みを擦り、そこから滲み出した先走り液を指に絡める。透明な液体が糸を引き、壱織の指と蒼真のペニスを繋ぐ。

「もう濡れてる。こんなに出して。興奮してるのか」

蒼真は首を振った。声を出さずに否定する。

「嘘だな」

壱織が低く笑った。その笑い声が蒼真の耳を擦る。

「そろそろ本気でいくぞ」

握る力が強くなった。ペニス全体を包み込み、上下に動かし始める。シュツ、シュツ、と乾いた音がする。先走り液が潤滑剤になり、音が湿ったものになっていく。シュコ、シュコ。

「ん、んん」

蒼真は唇を噛み締めた。声を出してはいけない。出したら最初からやり直した。

だが壱織の手が気持ちいい。認めたくないが、身体は正直に反応している。ペニスはますます硬くなり、先走り液が溢れ出している。竿に浮き出た血管が、壱織の指に擦られるたびに脈打つ。

「いい反応だ。でも声は我慢してるな」

壱織の手が速くなった。同時に、もう片方の手が胸に伸びる。乳首を指で摘み、捻り始める。

上と下を同時に責められる。快感が重なり合い、蒼真の思考を溶かしていく。乳首への刺激がペニスに伝わり、ペニスへの刺激が全身に広がる。

「声、出したくなってきただろう」

耳元で囁かれる。熱い吐息が首筋を擦る。壱織の唇が耳たぶを掠め、舌先が耳の縁をなぞった。

「我慢しろ。まだ終わりじゃない」

ペニスを握る力が更に強くなった。亀頭を掌で包み、捻るように擦り上げる。親指で尿道口を擦り、そこから溢れる先走り液を塗り広げる。ぬるぬるとした感触がペニス全体を包む。

「ふっ、んんっ」

蒼真は必死に耐えた。口を押さえ、歯を食いしばり、声が漏れないようにする。

だが限界が近かった。快感が下腹部に溜まっていく。睾丸が引き締まり、射精の予感が近づいてくる。

「出そうか？」

蒼真は小さく頷いた。

「まだ駄目だ」

壱織の手が止まった。射精寸前で放置される。ペニスが空しく脈打ち、達することのできない快感に蒼真の身体が震えた。

「声を出していないな。偉いぞ」

手が再び動き始めた。ゆっくりと、焦らすように。根元から亀頭まで、時間をかけて扱き上げる。

「出させてやる。だがもう少し我慢しろ」

ペニスを根元から亀頭まで、ゆっくりと扱かれる。一番敏感な裏筋を親指で擦り上げられる。カリの部分を指で挟み、くりくりと刺激される。

「んっ」

もう限界だった。我慢できない。出そうだ。出る。睾丸が更に引き締まり、精液が込み上げてくる。

壱織の手が急に速くなった。ペニスを強く握り、激しく上下させる。ぐちゅぐちゅと下品な音が響く。

「出せ」

その言葉と同時に、蒼真の身体が痙攣した。

「あっ」

声が漏れた。同時に、白濁した精液が噴き出す。一発目は勢いよく飛び出し、蒼真の胸まで飛んだ。二発目、三発目。壱織の手を汚し、自分の腹にも飛び散る。

「んっ、あ、あ」

射精の快感で意識が飛びそうになる。ペニスがびくびくと痙攣し、最後の一滴まで絞り出されていく。壱織の手が止まらない。射精中もペニスを扱き続け、全ての精液を搾り取る。

「声、出したな」

壱織の声が耳元で響いた。

蒼真は息を呑んだ。やってしまった。最後の最後で。

「すまない」

「謝るな。最初からやり直した」

壱織の手が、まだ敏感なペニスを再び握った。

「待ってくれ。今出したばかりだ」

「だから何だ」

「無理だ」

「無理じゃない」

ペニスを擦られ始めた。射精直後の敏感な状態で。亀頭を掌で包み、ゆっくりと捻るように刺激される。

「ひっ、あ、あ」

声が止まらなかった。快感と苦痛が混ざり合い、蒼真の身体を翻弄する。射精直後のペニスは過敏になっており、軽い刺激でも電流が走るような感覚に襲われる。

「ほら、また声が出てる」

「無理だって」

「やめない。お前が声を出すから悪いんだ」

壱織の手が容赦なく動き続けた。ペニスを根元から亀頭まで扱き、同時に乳首も摘み続ける。蒼真は壱織の胸にもたれかかり、喘ぐしかなかった。

「あっ、あっ、だめだ、また」

ペニスが再び硬くなり始めていた。さっき出したばかりなのに、壱織の刺激で身体が反応してしまう。

「もう勃ってきてるな。若いな」

「違う。これは」

「嘘つき。身体は正直だ」

壱織の手が更に速くなった。ずりゅ、ずりゅ、と下品な音が響く。先走り液と残った精液が混ざり、ぬるぬるとした感触になっている。

「出せ」

二度目の射精。さっきより少ない量だったが、快感は倍以上だった。全身が痙攣し、視界が白く染まる。精液がどろりと壱織の手に垂れ、蒼真の腹に流れ落ちた。

「はあ、はあ」

蒼真は完全に力を失った。壱織の腕の中でぐったりとしている。全身が汗ばみ、シャツが肌に張り付いている。

「よく頑張ったな」

壱織が蒼真の髪を撫でた。優しい手つきだった。さっきまでの容赦ない刺激とは全く違う、穏やかな触れ方。

「今日はここまでにしてやる」

蒼真は答えられなかった。



「明日もやるぞ。声を出さない練習だ。いつか、一度も声を出さずに達することができるようになる」

蒼真は何も答えられなかった。ただ荒い息をつくだけ。

「さあ、身体を拭いてやる。少し待ってる」

壱織が立ち上がり、隣の部屋に消えた。

一人残された蒼真は、天井を見上げた。

憎い男。自分を買った男。父の仇を追っている男。

なのに、最後に見せた優しさは何だったのか。髪を撫でる手は、まるで大切なものに触れるようだった。

分からない。分かりたくもない。

でも、心のどこかで思っていた。

この男の本当の姿は、まだ見えていない。冷酷な組長の仮面の下に、何かが隠されている。

それを知りたいとは思わない。思いたくない。

でも、知らずにはいられない気がした。

### 第3話 「鳴かない鳥」

「食わないのか」

壱織の声がした。

蒼真はトレイを見もせずに答えた。

「食欲がない」

三日目の朝。抵抗できることは、これくらいしかなかった。

トレイの上には、昨日と同じように朝食が並んでいる。焼きたてのパン、スクランブルエッグ、ベーコン、サラダ。湯気を立てるコーヒー。どれも美味しそうな香りを漂わせている。

蒼真はベッドの端に座ったまま、窓の外を見ていた。青い空。白い雲。自由に飛ぶ鳥の姿。

壱織はいつの間にか部屋に入ってきていた。今日は黒のタートルネックにスラックス。首輪をつけた犬のように繋がれている自分と、自由に動き回れるこの男。その対比が蒼真の心を抉った。

「嘘だな。腹の音が聞こえた」

蒼真は唇を噛んだ。確かに空腹だった。昨日の躰けで体力を消耗し、身体がエネルギーを求めている。だが、この男の用意したものを食べたくなかった。それだけが、今の自分にできる抵抗だった。

「食え」

「嫌だ」

「理由は」

「お前の出したものなんか食いたくない」

壱織が蒼真の前に立った。見下ろす目は冷たい。だがどこか、呆れたような色も混じっている。

「子供みたいな真似をするな」

「子供扱いしてるのはそっちだろ」

蒼真は立ち上がった。首輪のリードがベッドの柱に繋がれているので、動ける範囲は限られている。それでも、座ったままでは話せない。

「俺を買って、首輪をつけて、好き勝手して。俺には何の権利もないのか」

「ない」

壱織が断言した。その声に迷いはなかった。

「お前は俺のものだ。権利があるとすれば、俺が与えたものだけだ」

蒼真は拳を握りしめた。

「だが、一つだけ選ばせてやる」

壱織がトレイを指した。

「食事を取るか、別の方法で賄われるか。どちらがいい」

蒼真は壱織を睨んだ。別の方法。昨日の「声を出すな」ゲームのことだろう。あれ以上のことをされるのは御免だった。

だが、ここで折れるのも悔しかった。この男の言いなりになるのは、もう嫌だ。

「別の方法で」

言ってしまうってから、蒼真は後悔した。壱織の口元に、微かな笑みが浮かんだのを見て。

「そうか。お前の選択だ」

壱織が蒼真の腕を掴み、立ち上がらせた。首輪のリードを外し、代わりに自分の手でリードを握る。

「ついて来い」

連れて行かれたのは、見覚えのない部屋だった。

窓のない空間。壁は黒い布で覆われている。中央には大きなベッドがあり、ヘッドボードには革のベルトが取り付けられていた。その周囲には見慣れない器具が並んでいる。

「ここは」

「プレイルームだ。お前専用の」

蒼真の背筋が凍った。

「お前専用って」

「お前のために用意した。これから毎日、ここで寝る」

壱織が蒼真の背中を押し、部屋の中に入らせた。扉が閉まる音。鍵が掛かる音。逃げ場はない。

「脱げ」

蒼真は震える手でシャツのボタンを外した。一つ、また一つ。壱織の視線が肌を舐めるように這う。

シャツを脱ぎ、ズボンを下ろし、下着も脱いだ。全裸になった蒼真を、壱織が満足げに眺める。

「ベッドに横になれ」

言われるままにベッドに上がった。シーツは黒いサテン地で、肌に触れるとひんやりとした。

壱織が蒼真の手首を掴んだ。革のベルトで、ヘッドボードに固定される。続いて足首も。両手両足を広げた状態で、蒼真は完全に拘束された。大の字に固定され、身動きが取れない。

「今日のルールを説明する」

壱織がベッドサイドのテーブルから何かを取り出した。

電気マッサージ器だった。白い本体に、丸い先端。市販されているような形状だが、サイズは通常より大きく、見るからに振動が強そうだった。

「これを使う」

蒼真は身体を強張らせた。

「ルールは昨日と同じだ。声を出すな。出したらやり直し」

昨日は手だけだった。今日は道具を使うのか。

「昨日よりハードルを上げる。今日は五分間、声を出さずに耐えろ。耐えられたら、今日の躑は終わりだ」

「五分」

「長いと思うか？ 短いと思うか？」

蒼真は答えなかった。五分が長いかわかり、やってみなければ分からない。だが嫌な予感はしていた。

「では、始める」

壱織がスイッチを入れた。ブーンという低い音が響く。部屋の静寂を破る、不穏な振動音。

マッサージ器が蒼真の胸に当てられた。

振動が乳首に伝わった瞬間、蒼真の身体が跳ねた。

声を出しそうになって、必死に唇を噛む。振動が強い。想像以上だった。乳首を中心に、波紋のように快感が広がっていく。

「まだ一番弱いモードだ」

壱織が淡々と言った。

一番弱い。これで。蒼真は目を見開いた。

マッサージ器が乳首の上で円を描くように動かされる。小さな突起を中心に、ゆっくりと回転する。振動が敏感な先端を刺激し、電流のような快感が全身に広がっていく。

「んっ」

鼻から息が漏れる。声ではない。だがギリギリだった。

「一分経過」

壱織が告げた。まだ一分。あと四分もある。

マッサージ器がもう片方の乳首に移動した。同じように円を描き、振動で刺激する。左右交互に、リズムをずらしながら。片方が刺激されている間、もう片方は余韻で震えている。

蒼真の身体が震え始めた。乳首が硬く尖り、ピンク色から赤みを帯びた色に染まっていく。敏感になった突起が、空気に触れるだけでぞくりとする。

「感じてるな」

壱織が観察するように言った。

「乳首がこんなに立ってる。昨日より反応がいい。お前、本当にここが弱いんだな」

蒼真は答えられなかった。声を出したら負けだ。必死に唇を結ぶ。口の中で舌を噛み、痛みで快感を紛らわせようとする。

「二分経過。モードを上げる」

振動が強くなった。ブーンという音がヴィーンという高い音に変わる。振幅が大きくなり、乳首への刺激が倍増する。

身体が大きく跳ねた。声が出そうになる。必死に堪える。唇を噛み締め、歯が食い込む。血の味がする。

マッサージ器が乳首から離れ、胸の中心を滑り降りていった。振動が肋骨を伝い、腹筋の上を通り、へその周りをなぞる。

「ここは？」

振動が下腹部に当てられた。恥骨の上、ペニスの付け根のすぐ上。腸骨の内側、太ももの付け根に近い部分。

「ふっ」

息が漏れる。下腹部への刺激が、直接ペニスに伝わってくる。振動が骨盤を通じて、内部に響いていく。まだ触れられてもいないのに、ペニスが反応し始めていた。血液が集まり、少しずつ膨張していく。

「もう勃ってきてる」

杏織が蒼真のペニスを見下ろした。半勃ちの状態で、少しずつ硬くなっていく。先端から透明な液体が滲み始めている。

「三分経過」

あと二分。蒼真は必死に耐えた。

マッサージ器がペニスに近づいていく。太ももの内側を滑り、睾丸のすぐ横を通過する。振動が陰嚢を擦り、中の睾丸を揺らす。

「ここはどうだ」

振動が睾丸に直接当てられた。二つの球を包み込むように、マッサージ器の丸い先端が押し付けられる。

「ひっ」

短い声が漏れた。睾丸への刺激は予想以上だった。振動が精巣を直接揺らし、下腹部の奥に響いていく。

「今のは声か？」

「違う。息が」

「本当か？」

「本当だ」

「そうか。なら続ける」

マッサージ器が睾丸を優しく包むように当てられ続けた。二つの球が振動で揺らされ、快感が下腹部に溜まっていく。睾丸の奥から、じわじわと熱が広がっていく。

「んんっ」

蒼真のペニスが完全に勃起した。硬く反り返り、腹に向かって立ち上がっている。先端から透明な先走り液が滲み出し、亀頭を濡らしている。尿道口から糸を引くように垂れ、腹に落ちていく。

「四分経過。最後の一分だ」

壱織がマッサージ器を持ち上げた。

「最後は、ここだ」

振動がペニスに当てられた。亀頭を直接、マッサージ器の先端で刺激される。振動が最も敏感な部分を震わせ、快感が爆発的に広がった。

「あっ」

声が出た。止められなかった。

「声を出したな」

壱織が冷たく言った。

「やり直した」



「待ってくれ。今ので四分だった。あと一分だったのに」

「ルールはルールだ。声を出したら最初から」

壱織がマッサージ器のスイッチを切った。蒼真は荒い息をつく。ペニスが空しく脈打ち、達することのできない欲求に身体が震えた。

「一分休憩をやる。その後、最初からだ」

蒼真は天井を見上げた。悔しい。あと一分だったのに。

だが、ペニスに当てられた瞬間の快感は想像以上だった。あれに耐えられる自信がない。

「休憩終わり。始めるぞ」

マッサージ器が再び起動した。今度は最初から乳首ではなく、ペニスに当てられる。

「ひあっ」

声が出た。開始三秒で。

「やり直し」

「無理だ。いきなりそこは」

「無理じゃない。集中しろ」

三度目。今度は太ももの内側から始まった。ゆっくりと、焦らすように近づいてくる。振動が肌を這い、敏感な部分に近づいていく。

蒼真は必死に耐えた。唇を噛み、歯を食いしばり、声が漏れないようにする。

一分経過。マッサージ器が乳首を刺激する。二分経過。下腹部に移動する。三分経過。睾丸を揺らす。

マッサージ器がペニスに近づいていく。竿の根元に当てられ、ゆっくりと先端に向かって移動する。振動が血管の上を滑り、亀頭のすぐ下で止まる。裏筋を擦るように振動が伝わる。

「んっ」

四分経過。あと一分。

マッサージ器が亀頭に当てられた。振動が最も敏感な部分を直接刺激する。カリの部分を擦り、先端の窪みを震わせる。

声を出しそうになる。必死に堪える。あと少し。あと少しで終わる。

壱織がモードを上げた。振動が更に強くなる。ヴィーンという音がヴィィィンという甲高い音に変わる。

「あっ」

声が出た。同時に、射精した。白濁した精液が噴き出し、蒼真の胸まで飛び散る。一発、二発、三発。勢いよく噴射され、腹の上に白い線を描く。

「やり直し」

「もう無理だ」

「無理じゃない。お前が声を出すから終わらないんだ」

四度目の挑戦。マッサージ器が射精直後の敏感なペニスに当てられた。

「ひっ、あ、あ」

過敏になった亀頭が振動に震える。快感と苦痛の境界線上で、蒼真の身体が痙攣する。

「まだ三十秒だ」

「無理だって。今出したばかりなんだ」

「我慢しろ」

振動が容赦なく続く。射精直後のペニスは異常に敏感で、軽い刺激でも電流が走るような感覚に襲われる。

「あっ、あっ、だめだ」

声が止まらなかった。また最初からやり直し。

五度目。六度目。七度目。

蒼真は何度もやり直しを命じられた。そのたびに射精させられ、敏感になった身体を更に責められる。精液の量は徐々に減っていき、最後の方は透明な液体が滲み出るだけになった。

八度目の挑戦。蒼真はもう泣いていた。涙が頬を伝い、黒いシーツを濡らす。

「お願いだ。もう」

「あと少しだ。頑張れ」

壱織の声が、どこか優しく聞こえた。

マッサージ器が乳首から始まり、腹を通り、睾丸を刺激し、ペニスに到達する。蒼真は必死に耐えた。声を出してはいけない。出したら、また最初からだ。

一分。二分。三分。四分。

マッサージ器が亀頭に当てられた。振動が敏感な先端を震わせる。

声を出しそうになる。必死に唇を結ぶ。涙が溢れる。身体が震える。

五分。

「五分経過」

壱織の声が聞こえた。

「クリアだ。声を出さなかった」

蒼真は呆然とした。本当に？ 五分間、声を出さずに耐えられた？

「よく頑張ったな」

壱織がマッサージ器を止め、蒼真の拘束を外した。手首の革ベルト、足首の革ベルト。一つずつ外されていく。

「今日の躰けは終わりだ」

蒼真は動けなかった。全身が震えている。精液まみれの身体。涙で濡れた顔。

「シャワーを浴びてこい。その後、食事を取れ」

「分かった」

蒼真はベッドから降りようとして、足がもつれた。壱織が腕を掴み、支える。

「立てるか」

「多分」

「無理するな。肩を貸してやる」

壱織が蒼真の腕を自分の肩に回した。裸の身体を支え、ゆっくりと歩く。隣のバスルームに連れて行かれる。

蒼真はシャワーを浴びながら、考えていた。

この男は何なのだろう。容赦なく責めておいて、終わったら優しくする。冷酷なのか、優しいのか、分からない。

シャワーを終えて出ると、壱織が待っていた。バスローブを差し出される。

「着ろ」

「ありがとう」

思わず礼を言ってしまった。

言った瞬間、蒼真は自分の言葉に吐き気がした。こいつは俺を買った男だ。感謝なんかするべきじゃない。なのに、口が勝手に動いた。

壱織が少し驚いた顔をする。

「礼を言われるとは思わなかった」

「俺も言うとは思わなかった」

奇妙な沈黙が流れた。二人の間に、何かが変わり始めている気がした。

食事は壱織の私室で取ることになった。

テーブルには朝食の残りと、新しく用意された軽食が並んでいる。蒼真は空腹に負けて、素直に食べ始めた。

壱織は窓際に立ち、外を見ている。その横顔を、蒼真はちらりと見た。

「お前の親父のこと」

蒼真が口を開いた。壱織が振り返る。

「何だ」

「昨日、殺されたって言ってた。十年前に」

「ああ」

「どうして殺されたんだ」

壱織の目が細くなった。警戒するような、だがどこか期待するような。

「知りたいのか」

「分からない。でも、お前がなぜ俺を買ったのか、知りたい」

壱織はしばらく黙っていた。窓の外を見つめ、何かを考えている様子だった。やがて、ぽつりと話し始めた。

「親父は、久條組の先代組長だった」

低い声。感情を押し殺したような響き。

「俺が二十二の時だ。組の幹部に裏切られた。金と権力を欲しがった連中が、親父を殺して組を乗っ取ろうとした」

蒼真は黙って聞いていた。

「俺は復讐を誓った。裏切り者を一人残らず潰すと。十年かけて、ほとんど片付けた。だが、一人だけ逃げた奴がいる」

「それが」

「藤堂だ。お前の社長。当時、裏切り者たちに情報を流していた」

蒼真は息を呑んだ。社長が。自分を育ててくれた人が。

「藤堂は証拠を隠し、表の世界に逃げた。芸能事務所を立ち上げ、まともな人間のふりをしてる。だが俺は知っている。あいつが親父を殺した連中の一味だと」

「だから俺を」

「そうだ。お前を使って、藤堂を引きずり出す」

壱織が振り返った。その目には、昨日とは違う感情が浮かんでいた。悲しみ。そして、孤独。

「あいつもお前と同じ目をしていたよ」

言った瞬間、壱織の表情が微かに強張った。言うつもりはなかったのだろう。蒼真にはそう見えた。

「親父だ。殺される前の夜、俺と話した時の目。信じていた人間に裏切られた、あの目」

蒼真は言葉を失った。

「お前も同じ目をしてる。藤堂に裏切られた目だ」

沈黙が落ちた。

蒼真は壱織の目を見つめた。冷酷な組長の仮面の下に、父を失った孤独な男がいる。

「お前も、俺と同じなんだな」

蒼真が静かに言った。

壱織の目が鋭くなる。

「何だと」

「信じてた奴に裏切られた。だからこんなことをしてる」

壱織が黙った。否定しなかった。

蒼真は初めて、この男を「見た」気がした。

壱織が部屋を出て行った。

一人残された蒼真は、窓の外を見た。

この男の本当の姿が、少しだけ見えた気がした。冷酷な組長の仮面の下に、父を失った孤独な男がいる。

だから俺は、お前を放っておけない。

壱織がそう言ったわけではない。だが、蒼真にはそう聞こえた。

## 第4話 「闇の中で」

「お前の社長、色々と裏があるらしいな」

壱織は書類から目を上げずに言った。

四日目の夜。蒼真は書斎のソファに座り、その背中を見つめていた。

黒いシャツに包まれた広い背中。時折、ページをめくる音だけが響く。窓の外では雨が降り始め、静かな雫の音が聞こえてくる。奇妙に静かな時間だった。

「何を讀んでるんだ」

蒼真が口を開いた。三日間の躰けで、少しだけ壱織との距離が縮まっていた。完全に心を許したわけではない。だが、ただの恐怖ではなくなっていた。

「お前の社長の資料だ」

壱織が振り返らずに答えた。

「藤堂の過去を洗っている。十年前に何があったか。誰と繋がっていたか」

「見つかったのか。何か」

「まだだ。だが、手がかりはある。藤堂は十年前、突然芸能界に現れた。それ以前の経歴が曖昧すぎる」

壱織が椅子を回し、蒼真に向き直った。その目は真剣だった。いつもの余裕ある表情が消え、代わりに切迫したのが見える。

「お前に聞きたいことがある」

「何だ」

「藤堂は、お前に何か渡さなかったか。書類でも、写真でも、データでも。何か大事なものを預けられた記憶はないか」



蒼真は首を傾げた。

「特には。社長は俺に仕事以外のことは話さなかった」

「本当か？」

「本当だ。プライベートなことも、過去のことも。俺が聞いても、いつも話をそらされた」

壱織の目が細くなった。疑っているのか、考え込んでいるのか。

「お前、藤堂に引き取られた時のことを覚えているか」

「覚えてる」

「どんな状況だった。詳しく話せ」

蒼真は記憶を辿った。十五歳の頃。孤児院で暮らしていた自分のところに、突然スーツ姿の男が現れた。

「孤児院に来た。高そうなスーツを着た男が。俺を引き取りたいと言った。芸能事務所をやっていて、俺にはスターになる素質があると」

「それだけか」

「いや」

蒼真は眉を寄せた。思い出そうとすると、記憶が曖昧になる部分がある。あの日のことは鮮明なはずなのに、細部がぼやけている。

「社長は何か書類を持っていた気がする。俺に関する書類じゃなくて、別の何か。封筒に入った、厚い書類。茶色の封筒だった」

壱織が立ち上がった。その目に光が宿る。

「それだ」

「え？」

「藤堂は、俺の親父が殺された後に姿を消した。だが、消える前に組から書類を持ち出した。その書類には、裏切り者たちの名前と、取引の記録が書かれていた。金の流れ、関係者の連絡先、全てが記録されていた」

蒼真は息を呑んだ。

「その書類があれば、藤堂を追い詰められる。証拠として使える。だが、どこにあるか分からない。藤堂は証拠を隠すのが上手い。十年間、俺はずっと探し続けてきた」

「でも、俺は何も」

「お前が知らないだけかもしれない。どこかに隠されているか、お前自身が気づいていないか。記憶の奥に、手がかりがあるかもしれない」

壱織が蒼真の前に立った。見下ろす目には、昨日とは違う色があった。焦りではない。期待。そして、何かを賭けるような真剣さ。

「お前の記憶を、もっと深く掘り起こす必要がある」

「どうやって」

「五感を鋭敏にする。視覚を奪い、他の感覚を研ぎ澄ませる。そうすれば、忘れていた記憶が蘇ることがある。催眠に近い状態だ」

蒼真の背筋が冷たくなった。

「今日の躰けだ。ついて来い」

プレイルームに連れて行かれた蒼真は、いつものようにベッドに横たえられた。

だが今日は、拘束が違った。両手は頭の上で縛られているが、足は自由だ。

「今日は足は縛らない。その代わり、これを使う」

壱織が取り出したのは、黒いシルクのスカーフだった。光沢のある布地が、部屋の明かりを反射している。滑らかで柔らかそうな質感。